

司式:吉田千鶴子  
奏楽:堀口 恵美

前奏:「我らより神の怒りを除きたましわれらの救い主」(J.S. バッハ)

招詞:これは主の御業、わたしたちの目には驚くべきこと。今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。(詩 118:23-24)

讚美歌:20「主に向かってよろこび歌おう」

交読詩編 118:19-29

- 19 正義の城門を開け/わたしは入って主に感謝しよう。
- 20 これは主の城門/主に従う人々はここに入る。
- 21 わたしはあなたに感謝をささげる/あなたは答え、救いを与えてくださった。
- 22 家を建てる者の退けた石が/隅の親石となった。
- 23 これは主の御業/わたしたちの目には驚くべきこと。
- 24 今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。
- 25 どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。
- 26 祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。
- 27 主こそ神、わたしたちに光をお与えになる方。祭壇の角のところまで/祭りのいけにえを綱でひいて行け。
- 28 あなたはわたしの神、あなたに感謝をささげる。わたしの神よ、あなたをあがめる。
- 29 恵み深い主に感謝せよ。慈しみはどこしえに。

#### 朗読聖書①ゼカリヤ書 9:9-10

- 09 娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者/高ぶることなく、ろばに乗って来る/雌ろばの子であるろばに乗って。
- 10 わたしはエフライムから戦車を/エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ/諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ/大河から地の果てにまで及ぶ。

#### 朗読聖書②ヨハネによる福音書 12:12-19

##### ◆エルサレムに迎えられ

- 12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、
- 13 なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、/イスラエルの王に。」
- 14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。
- 15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、/ろばの子に乗って。」
- 16 弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。
- 17 イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。
- 18 群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである。
- 19 そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか。」

#### 祈祷

十字架の道を歩まれた主イエス・キリストを、この世に、お遣わしくくださった愛と慈しみに給う慰めに満ちた神様が褒め称えられますように、あなたの聖名を褒め称えます。

神様、あなたは私たち一人ひとりを捕らえ、あなたを“主”と告白するように為さしめ信仰を与えてくださいました。そして今日も、夫々に新しい朝を備えてくださり、一人ひとりの名を呼び、教会へと、ライブ配信へと招いてくださいました。あなたによる群れとして、愛する兄弟姉妹と共に、この礼拝に与ることが赦されていますことを感謝致します。今献げますこの礼拝が神様ご自身の真の栄光が表される礼拝となりますよう、御霊をもって、この所に臨んでいてくださいますように祈ります。

私たちは、先の主日、御言葉を頂いて夫々の場に押し出されました。けれども御言葉から離れること多く、あなたに背くことが多くあったことを御前に告白致します。このような私たちを、主イエスはすべてご存知でいらっしゃるのに、主イエスは何も罪を犯されませんでしたのに、ただ神様の御心に従って私たちの罪の為に十字架にお架かりになり、限りない愛で私たちに満ちし、命と希望に導いてくださっています。主イエスがどれほどの痛み、苦しみを何のために受けられたのかを思い起こし、主の御跡に従って生きる者とさせてください。あなたの慈しみにより、古いものを脱ぎ捨てさせ、私たちに新しいものへと造り変え、新しい命を得させてください。

教会の頭である神様、あなたの教会は4月より新しい年度の歩みを始めております。三年間教会を牧された牧者をあなたは新しい場に派遣され、私たちは感謝を以て送り出し、新たにあなたが派遣してくださいました牧者を迎えることができましたことを心より感謝致します。与えられました牧者が存分にあなたの御用を為すことができますように、教会員一人ひとりがこの牧者を愛し、支え、励ますことができるように、聖霊の導きとあなたのお守りを希います。

また、一人の長老を召し、長老会に加えてくださいましたことも喜びを以て感謝致します。新しい長老の働きが、あなたによって祝されますように。また、教会員一人ひとりが互いを思いやり、愛を以て連帯することができますように、キリスト・イエスにある交わりに相応しいように心がけることができるように為さしめてください。公同の教会として、御心に適った働きを出すことができますように。信濃町教会の2025年度の歩みが、あなたのご栄光を現すものとなりますよう、あなたが御言葉を示し下さり、私たちがその御旨を求めて歩んでいきますよう、聖霊の導きが豊かにありますように祈ります。

神様、本日は午後あなたの御用のために働かれた私たちの先達を覚え、祈りを合わせようとしております。教会創立からの先達お一人おひとりの働きを、あなたの祝福により、私たちが祈念し感謝を献げる時となりますように、どうぞ守り導いてください。そして、あなたのお導きによる100年を感謝する記念事業の完成に向かって、今年度も歩むことができますようにお守りください。

この世の支配者である神様、今も世界の各地で戦争や紛争が絶えません。そして、私たち一人ひとりの罪が、あなたの平和を脅かしていることをお赦してください。そしてどうかあなたが介入して、国々の為政者を平和への道へと導いてください。また慈しみを以て私達をあなたの平和の為に用いてください。小さい私たち一人ひとりに為すべきことをお示しください。弱くされている方々に寄り添い、あなたの福音を宣べ伝えることができるように、知恵と勇気を与えてください。一人ひとりの尊厳が、あなたの愛と平和により守られ、回復されますように願います。聖霊の導きとあなたの

お支えをお祈り致します。

愛に富み給う神様、本日この礼拝を共に与ることができない兄弟姉妹を、あなたの豊かな愛と御恵みで満たしてください。私たち教会の肢々を、あなたの愛によって一つとしてください。様々な困難を抱える者、孤独の中にある者、あなたの救いとお支えを必要としているすべてのものに、あなたの慈しみと励ましと祝福がありますように、主の平安を祈ります。

今日の説教者を感謝致します。御言葉を取次ぐ牧者が聖霊により強められ、大胆にあなたの御言葉が語られますように。聴く私たちの心と目と耳を開かせてください。語られた御言葉が新しい価値となり、一人ひとりが主イエスのご受難に思いを致し、あなたによって守られる今日から始まる受難週を過ごし、次週は復活をお祝いする主の日の礼拝に再びあなたによって集められ、礼拝に与ることができますように聖霊の導きを祈ります。

全てが主の御心になりますように。この祈りを、主イエスキリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

長老就任式(西窪幸子)

讃美歌:307「ダビデの子、ホサナ」

説教 「イエスが見たもの」

大谷昌恵

今日、私は、この信濃町教会のこの講壇に初めて立たせて頂きました。多くの会衆の皆様を熱く受け止めております。「あの日」、主イエスをご覧になったのも、もしかしたら、今の私が見ている景色と似たものだったのではないかと、今、私は思うのです。「あの日」とは、「棕櫚の主日」、2000年前、主イエスがエルサレムへと入って行かれた日です。私が「今、私が見ている景色と似ている」という意味は、決して、「皆さんが熱狂して私を迎えてくださっている」という意味ではありません。ロバの子に乗ったイエスは、周りに集まった人々よりも、少し高い位置から人々を見ていたはずで、周りの人々よりも視線の位置が高かった、そのことを申し上げたかったのです。

子どもとは言えロバの背に乗っていらっしゃるのですから、それほど高くわなくても、地面に立っている人々よりは高い位置に視線があったことでしょうか。ということは、それまでそれだけ遠くまで見ることができた、周りにいる人々よりも、先の方まで見ることができたはずで、そのイエスをご覧になったものは何だったのでしょうか？私はロバの子の背に乗ったイエスが見たものが何だったのかを知りたいと思いながら、この個所を本日の新約聖書の箇所を選びました。

12節で言うところの「その翌日」とは、過越祭の5日前、ということになります。12章でイエスは、過越祭の6日前、ベタニアに行かれています。“そこには、イエスが死者の中から甦らせたラザロがおり、マリアが非常に高価なナルドの香油をイエスの足に塗り、自分の髪でぬぐった(12:1-3)”、という出来事が起きています。イエスがエルサレムへと入って行ったのは、その翌日のことです。イエスがエルサレムに来ると聞いた大勢の群衆は、手に手に、なつめ椰子・棕櫚の枝を持ち、それを打ち振りながら迎えます。この時の群衆の喜びの叫びは、先ほど皆さんと一緒に交読した詩編118篇25. 26節【どうか主よ、わたしたちに救いを(ホシア・ナー(חֲסִיָּאָה) [“ホサナ”の原語、救い給え。どうか] 嘆願の叫び、賛美とも解される)。どうか主よ、わたしたちに栄えを(ハツリハー・ナー(חַטְּוֹתֵינוּ) [成功させ給え。どうか]、ツァーラハ(צְלָחָה) [栄えさせる] 礼拝。恩寵用語)。祝福

あれ(バルーフ・ハバー(בְּרֻחַ הַקּוֹדֶשׁ) [成功させ給え。どうか] 現代語 “よくいらっしゃいました”」、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。《25. 26節悔い改めの祈り「ホサナ・主の御名によって来られる人に、祝福があるように」=千年王国を待つ=》】からとられています。さらに、15節以降はゼカリヤ書9:9【娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者/高ぶることなく(アニー(אֲנִי) [柔和な方])、驢馬(ハモール(חֲמֹר) [驢馬])に乗って来る/雌驢馬の子(アイル(אֵיל) [子ロバ])である驢馬(アトーン(אֲתוֹן) [雌驢馬])に乗って。】が用いられています。これは、このゼカリヤ書がメシアを期待する預言として用いられているということです。しかし、弟子たちには最初、この群衆の叫び声が、何を意味するのか分かりませんでした。人々の雄叫びを聞いて初めて、それが救い主を待望する人々の声なのだと思えたのです。

イエスと弟子たちを囲む群衆の数がどれほど多かったかは、19節以下のファリサイ派の人々の言葉を読めば、お分かりになるでしょう。「何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったのではないか。」如何に多くの人々が、イエスと弟子達について行ったのか。ファリサイ派の人々はこの様子におそらく、怒りとも不満ともつかない思いを抱いたに違いありません。

エルサレムに迎え入れられる、つまり、これは、王であるイエスが、ご自分の城であるエルサレムへ入って行かれるということです。普通で言えば、王が戦いに勝って自分の城へ帰ってくる時には、煌びやかに着飾り、馬に乗って、家来を従え、捕まえた捕虜達を見せしめのように行列させて、さぞや華やかな立派な隊列を組んで城へと帰って来るものでしょう。人々がそのような王の行列を期待したとしても無理はありません。しかし、イエスは違いました。派手な軍備をするわけでもなく、当然のことながら、捕虜も居ず、付き従っているのは僅かな弟子達だけだったのです。しかも乗っているのは馬ではなくてロバの子供、馬はロバよりも遥かに大きいですから、もしもその背にイエスが乗っていたならば、もっと遠くまで視線を巡らすことができたでしょう。しかしロバ、しかも子供のロバですから、さほど遠くまでは見渡せません。逆に言えば、人々からもイエスを遠くからでも見る事が出来る訳はなく、近くに寄ってみなければ、そこに自分達が期待を持った王が居るとは分からなかったはずで、

ロバはパレスチナでは挽臼をひいたり、または、重い荷物を運ぶために用いられていたそうです。馬は自分の意思でかなり自由に動き回りますが、ロバというのは従順に同じ所を一日中歩いているように歩いているそうです。そして何よりも、馬は昂然と頭を高く振り上げることに対して、ロバは常に首を垂れて歩いています。この様子から、馬、特に軍用の馬からは、戦いを象徴的に感じ取ることができるのに対して、ロバは謙遜の徴、平和の象徴とも言えるでしょう。ですから、イエスもこのロバをご自分がエルサレムへと入って行くときの乗り物として用いられたのではないのでしょうか。ゼカリヤ書9:10には「わたしはエフライムから戦車を/エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ/諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ/大河から地の果てにまで及ぶ。」とあります。

イエスは、ロバの子に乗ることで平和をもたらすということの人々に告げようとしたのです。こうして、なつめ椰子の葉を熱狂的に振りながら群衆はイエスを迎えます。人々はこのイエスこそが、自分達が待ち望んでいたメシア・救い主であり、自分達をこの今の苦しく厳しい状況から救い出してくれる王だと思っています。なぜ、彼らはそのように考えたのでしょ

うか。

ここまで聖書は、多くのイエスの奇蹟物語を記しています。特に、ラザロを生き返らせたことは、人々がイエスを救い主として迎え入れる根拠になったでしょう。一度、命を失ったものを生き返らせることが出来るのは、神以外の何ものでもないからです。だからこそ、ファリサイ派の人々が、「世をあげてあの男について行った」と言うほど、多くの人がイエスの後に従ったのです。イエスこそが、救い主であり、自分達を助け出してくれる存在である、それが人々の考えるイエスでした。そんな人々をイエスはロバの子の背の上から、どんな思いで見いていたのでしょうか。

イエスがエルサレムに入った日から、まさに受難の日々が始まります。十字架の道行きです。ローマ軍に捕らえられ、大祭司によって裁かれ、死刑の判決を受け、そして十字架に架けられます。それが、この日から起きることの真実です。決して、煌びやかな王の行列を見るようなわけにはいかず、人々は、それどころか、このイエスに失望し、石を投げ、愚弄し、イエスを嘲笑うのです。それはイエスの噂を聞いて集まった群衆だけのことではありません。イエスの弟子たちでさえも、その場から逃げ出してしまうのです。なんということでしょうか。しかし、その人々の姿をイエスは既にこのロバの子の背中の上から見通していたのです。

イエスが見ていたのは喜びに溢れて、なつめ椰子の葉を打ち振り、歓喜の声を上げてイエスのエルサレム入城を待ち受ける人々の姿ではなく、期待を裏切られ、罵られ、唾を吐きかけ、石を投げつけて十字架への道歩いて来る人々の姿だったはずでした。

人間とは一体どのような存在でしょう。神の前に、罪の無い人などいない、それが人間なのです。本来、罪人である私達人間は、神の前に審かれること無く立つことはできません。神が罪人の私達と共にいて下さることはできないはずですが、しかし、イエスはそのことを可能にするために、罪のないご自分が十字架に架かってくださいました。そして、そのことによって初めて私達は、神と共にいることができるようになったのです。つまり、イエスはその事のためにエルサレムに来てくださった、ご自分が十字架にお架かりになることが分かっているながら、ご自分の死を充分に自覚されながら、このエルサレムという場に来てくださったのです。それはまさに、平和のためだと言えるでしょう。私達人間に平和を与えるために、イエスはご自身の命を献げてくださったのです。私達人間にとって十字架とは何でしょうか。決して飾りではありません。

主イエスが十字架に架かって死んでくださったことで、今の、この私達の命があるのです。人間は自分にとって都合のいい事には熱狂的に向かっていきます。それがどんなに都合が悪い事だとしても、自分のためになるならば、それがどんなに困難なことであっても、まっしぐらに進んでいくものです。しかし、そうではない、自分にとって何の得にもならないことだと分かれば、そこから、すぐに逃げ出してしまいます。それこそが人間の弱さであり、人間のずる賢さでもあるのです。

今の時代、皆さんはどんな希望を持って生きておられますか？ イエスの時代には、恐らく各人々が、希望なんて持つことができなかつたはずですが、貧しさの中で、ただ、生きることだけに必死になって、爪の先に火を灯すような生活しかできなかったとしても、それでも、生きていくしかなかった。それがイエスの時代の人々でした。その人々にとって、数々の奇蹟を起こし、死んだ人まで甦らせたイエスはどれほど大きな希望の光にな

ったことでしょう。“この人こそが、私達を助け出してくれるはずだ。昔から言われてきたメシアが、今この時代に私達を助けるために来てくれたのだ”と、それこそ大き過ぎるほどの期待を持ってイエスを迎えたことでしょう。彼らにとっては、イエスこそが生きる望であり、希望だったのです。そのイエスが、結局は十字架に架けられてしまう。それは、人々にとって絶望としか言いようがなかつたはずですが、その後の復活によってイエスが語られていたことが、まさに真実だったことを知るまで、人々にとってイエスは絶望の人に成り果てたのです。

エルサレムに入って行くイエスを歓呼の声をもって迎えた人々の中には当然のことながら私達もいました。そうです。私達もイエスを王として熱狂的に迎えた一人ひとりなのです。そして、その喜びの姿が次第に失望へと変わり、十字架につけられたイエスの元から離れ去っていく姿をイエスは見ておられたのです。まさにそれは私達自身の姿であり、イエスがロバの子の背の上から見ていた姿なのです。“そんなわけがない”、と言う方もおられるでしょう。しかし、そうではありません。私達一人ひとりが、あのイエスを十字架につけ、死へと追いやったのです。私達の罪がイエスを十字架への道へと歩ませたのです。そのことを、今、私達はしっかりと自覚しなければなりません。

今日の棕櫚の主日から受難週が始まります。まさに一日一日が十字架への道です。そこをイエスは2000年前、一步、また一步と歩いて行かれた。何故、罪の無いご自分がこの十字架を背負い、この道を歩いていかなければならないのかと思いつながら歩かれたのではないのでしょうか。私達にとっては2000年前の出来事だと言って終わりにできることではありません。私達の罪が、今のこの時代を生きる私達が、イエスを十字架に架けたのです。神の御子を十字架に付けたこと、それは何ものにも代え難い大きな罪です。しかし、イエスはそれを“善し”としてくださった。そうすることで、私達の罪が赦され、神の子として復活の永遠の命を得ることが出来たのです。決して、私達は責められて終わるのではないのです。神はご自分の大切な御子を差し出してまで私達の罪を赦してくださいました。そのことを忘れてはなりません。

私達には希望があります。復活の命に与るといふ希望があります。「**あの日**」、ロバの子の背の上からイエスが見たものは、決して十字架に付けられたイエスを見て、絶望だけに終わる私達ではありません。その先に罪赦された者として生きることが出来る私達人間の姿を見てくださっていたはずですが。

今日から始まる受難週の日々、夫々に主の御受難を偲びつつ、十字架への道を歩んでいきましょう。そして、次週の主日には、ご復活の喜びの主日を共に迎えましょう。

共に祈りを合わせましょう。

神様、2000年前の今日、人々が熱狂し、喜びを以てあなたの御子をエルサレムへと迎え入れました。しかし、それは一時の思いに過ぎませんでした。ロバの子の背から人々のその有様を見ていた主イエスは、何を思われていたでしょう。どうか、この罪深い私達をお赦しください。

今日から始まる受難週の日々、主イエスの痛みを思いつつ、日々歩いていくことができますように私達をお導きください。この祈り、主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讃美歌:309「あがないの主に」

献金・感謝(西崎里美)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天にいらっしゃいます父なる神様、今日、会堂に集まり、あるいはライブ配信によって礼拝を献げられたことに感謝致します。

大谷先生を通して豊かな御言葉の説き明かしを頂きました。神、ロボに乗ってこられた真の意味を、平和をもたらして下さること、私達の罪について考える事ができました。この恵みを感謝し、神から多くの物を頂いている中から僅かな物ですが、お献げを致します。どうぞ教会のご用のためにお使ください。

この1週間を主の祈りをもちまして始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 89「共にいてください」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私達の上に豊かに、永久とこしえにありますように。アーメン。

報告:新年度委員会組織とアンケート用紙配布、多くの皆さんが教会の活動に加わってくださいますように切にお願い致します。週報に記載のない集会:(1)本日 12 時財務委員会(教師室)、(2)16 日(水)10 時から「100 周年年表」打合せ。(佃主任牧師)

後奏:「われら汝に感謝す、主イエス・キリストよ」(J.S. バッハ)